



末松氏

修身入門

教師用

全

139
27

K121.1
20

K121.1

20

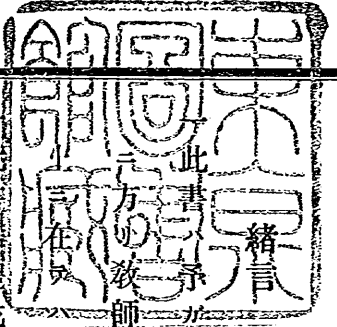
文學博士 末松謙澄著

修身入門

全

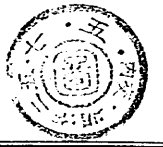
精華舎

修身入門 教師用

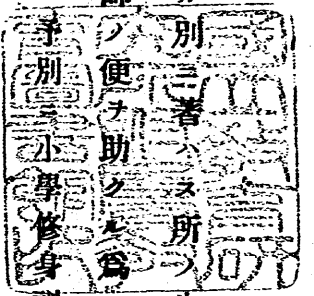
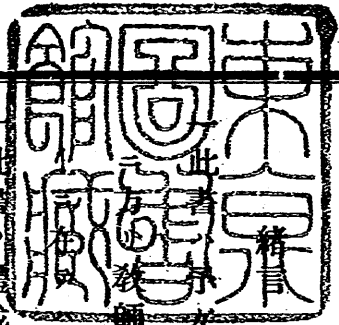


此書が別ニ著ハス所ノ生徒用修身入門ヲ教授スル
ニ方ノ教師ノ便ヲ助クル爲メ著ハス所ナリ其二年生以
予別ニ小學修身訓ノ著アリ

一此書ノ體裁直チニ教師親ク生徒ニ教授スル口吻ヲ用ユ
是レ教師ヲシテ翻案ノ徒勞ヲ免レシメンガ爲メナリ然
レモ單ニ朗讀スルト一般ノ教授ヲ爲ス時ハ甚ダ艱澁ニ
流レ易キガ故ニ善ク此書ノ趣旨ヲ咀嚼玩味シ然ル後チ



修身入門 教師用



生徒用修身入門ヲ教授スル
別ニ著ハス所ナリ其二年生以
下ノ便ヲ助ケル爲メ著ハス所ナリ
予別ニ小學修身訓ノ著アリ

一此書ノ體裁直ニ教師親ク生徒ニ教授スル口吻ヲ用ユ
是レ教師ヲシテ翻案ノ徒勞ヲ免レシメンガ爲メナリ然
レモ單ニ朗讀スルト一般ノ教授ヲ爲ス時ハ甚ダ艱澁ニ
流レ易キガ故ニ善ク此書ノ趣旨ヲ咀嚼玩味シ然ル後ナ



修身入門者言

五・五
七・七
八・八
九・九
一〇・一〇
一一・一一
一二・一二
一三・一三
一四・一四
一五・一五
一六・一六
一七・一七
一八・一八
一九・一九
二〇・二〇

之ヲ自家ノ肺肝ヨリ吐出シ之ニ加フルニ丁寧反復ヲ以テスベキコト勿論ナリ

一此書各題先ヅ一般ノ訓誨ヲ置キ次ニ圖解ヲ置キ訓誨ト圖解トヲ區別ス然レモ教授ノ實際ニ臨ミテハ或ハ兩者ヲ混和シテ之ヲ口授シ或ハ先ヅ圖解ヲ示シテ後ニ一般ノ訓誨ニ及ブ等ノ變例ヲ交フルハ固ヨリ妨ケナシ要スル所ハ生徒ノ心ヲシテ倦ザラシムルニ在リ

一諸般ノ作法ハ此書特ニ之ヲ記述セズト雖モ教授ノ實際ニ臨ミ宜ク之ヲ教示スベキナリ例ヘハ父母ニ禮スル子供ヲ説クニ方リテハ其ノ之ヲ禮スルノ方式ヲ教示スル

ノ類是レナリ

一此書特ニ問題ヲ掲ゲス是レ初學ノ兒女ニ在テハ未タ多ク問難ヲナスニ適セザルヲ信ズレバナリ然レモ少シク進歩スルニ從ヒ時々極メテ簡易ノ發問ヲ試ムルハ妨ケナシ例ヘハ正直トハ如何ナルコトゾカダハ者ヲ侮リテモヨキヤト問フノ類是レナリ

一此書ハ生徒ヲシテ生徒用修身入門ヲ用ヰシムルモノトシテ著ハシタルハ勿論ナリトス然レモ萬一否ラザルモ仍之ヲ教師用ニ充テ可ナリ但此場合ニ於テハ教授ノ際少シク圖解ノ言辭ヲ變シ之ヲ例話ト爲スベキナリ

編纂者識

修身入門 教師用

題目

第一	父母に禮する子供	一	丁
第二	祖父母に親切なる子供	一	丁
第三	兄弟なかよき子供	二	丁
第四	友たちとなかよき子供	二	丁
第五	病人に親切なる子供	三	丁
第六	かたはものゝ親切なる子供	四	丁
第七	正直なる子供	四	丁
第八	すなほなる子供	五	丁
第九	行儀よき子供	五	丁
第十	教師をうやまふ子供	六	丁

第十一	書物を大切に する子供	七丁
第十二	勇氣ある子供	七丁
第十三	おやにはかうくすべし	九丁
第十四	兄弟はなかよくすべし	十丁
第十五	兄弟は両手の如し	十丁
第十六	友たちは親しくすべし	十一丁
第十七	友の難儀は救ふべし	十二丁
第十八	年よりはいたはるべし	十三丁
第十九	かたは者はあはれむべし	十三丁
第二十	教師はうやまふべし	十四丁
第二十一	行儀は正しくすべし	十四丁
第二十二	いたづらなどをなすべからず	十五丁

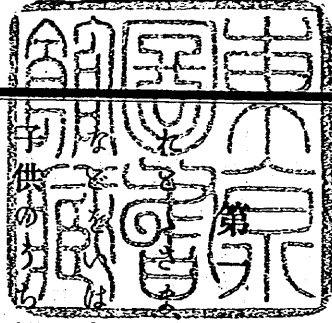
第二十三	過をかくすべからず	十五丁
第二十四	正直にすべし	十六丁
第二十五	危き遊をなすべからず	十七丁
第二十六	からたは大切にすべし	十八丁
第二十七	食ひ物を慎むべし	十八丁
第二十八	わる口を云ふべからず	十九丁
第二十九	疝癢を起すべからず	十九丁
第三十	弱きものをいぢむることなけれ	二十丁
第三十一	能く勉強すべし	二十二丁
第三十二	路くさをくふべからず	二十二丁
第三十三	國と君とを忘るべからず	二十三丁
第三十四	君が代	二十三丁

修身入門 教師用

末松謙澄著

父母に禮する子供

おかしさまの前には、丁寧に禮儀をして、たゞ
 ずはめられるやうにふるのが第一なり、とかく
 は親にぞんざいなる言葉をつかひ、出入りの時
 にも禮儀をなさざるものあれども、其れは善らぬ行ひあり、
 小さきうちは、猶更おどなく親につらふべし、禮儀は子供
 にも、至て大切なるものなり、



〔圖解〕此繪を御覽兄弟の子供が父母に禮せる所なり、朝起きたる時、夜寢るときに入る時、學校などに行くため家を出づるとき、又歸りたる時、總てりやうにしてよく禮をなすべきなり、

第二 祖父母に親切なる子供

れぢゞさまおはゞさまは、年よられたまへる上に、れとゞさまおかゞさまの親なれば、大切に思ひてつかへ、折々は肩をさゞゞき、何事も親切にすべし、世間の子供にはぢゞはゞを大切にせよ、からゝひなと云ふて、れほせとを守らぬものもある、極々よりらぬことなり、いつも變りなく、親切を

盡すが肝要なり、

〔圖解〕此繪を御覽、女の子はぢゞさまの肩をたゞゞき、男の子ははゞ様の前へて書物をひらき、二人とも祖父母に親切を盡して其心を慰め居る所なり、ぢゞ様、はゞ様の爲めには、此子供は孫なれば、おとゞ様、おかゞ様と同じ様、子供をうはるがり玉ふ者なれば、誰れも此子供の如く、ぢゞ様はゞ様に親切を盡すべし、

第三 兄弟なかゞき子供

日頃のあそびで、にてても、兄弟の喧嘩をせよ、仲よくすべし、兄弟の仲よき、何寄のことなり、兄は弟をいぢめ、弟は兄に

さからひ杯しては、兄弟ながら身の爲めによからず、仲よければこそ、たのしみもあるものなれ、

〔圖解〕此繪を御覽、是は兄を頭に、弟妹とも都合四人にて、菓子などを分けて仲よく遊び居る所なり、總て兄弟は幾たりありとも喧嘩をせせず、何事に付ても互に譲り合ひて睦まじくすること、此繪の子供のやうになすべきなり、

第四 友だちこなかよき子供

兄弟の次に親しきものは、友達なれば、友達と、喧嘩をせざるによろしからず、學校のゆきかよひなど、年したの者をいぢめたり、泣したりする子供あるは、友達がひなきわさな

り、友達は互に親切を盡し合ひて仲よくすべきあり、

〔圖解〕此繪を御覽、此處は〔上圖〕女の子の友たちが二人にて手玉を取り仲よく遊び居る處、又此處は〔下圖〕男の子の友たちが二人にて獨樂をまはして仲よく遊び居る所なり、總て友たちが喧嘩口論をなし、つかみあひを爲すなどは、よなほど悪きわざなれば、誰れも幼き時より、何事に付ても、此子供の如く互に仲よくしらすべし、

第五 病人に親切なる子供

誰れも病にかゝれば、身おどろへ、心もよこるものなれば、子供なりとて親切に氣をつけて、其心をなぐさむべし、病人の

そばにて、さわぎ、たはむれなどして、病ひにさはることをなすは至てよからぬことなれば、何事もねんころにすべきなり。

(圖解)此繪を御覽一人の子供が病氣せるは、様の前にて、びんの薬を薬茶碗に入れて差上げ居る處なり、かやうに親切になす時は、病人の心もなぐさみ、速になほるべけれども、世の中の子供には、病人の心にさからひ、病人の枕近くにて、太鼓を打ち、しこをふとなどして、病人の心をなやます者も少なからず、甚たよからぬわざなれば、家の内に病人のある時は、誰も此繪の子供の如く、よく親切を盡す

べきなり、

第六 かたはものに親切なる子供

からたのそろはずして、なみくならぬは、生れつきか、又はけがなによるものにして、からたのそろひたるものよりは、不仕合なるものなれば、われもかくありたらんにはと思ひやりて、親切にすべし、かたはものを見て、おもしろがり、からかひ、わらひなどするは、誠し宜しからず、かたはものには、取別け親切にする心掛けあるべきなり、

(圖解)此繪を御覽、此れは盲が小橋を渡り兼て居る所を、獨りの男の子が手引きして渡し居る所なり、總てかたは者

になんじふなる事あまど見は、情けを掛て助くる事、此子供
の如くなるべし。

第七 正直なる子供

うそをいひ、人をどまし、或は取るまじきものを取りかどす
るは、みなよろしからず、正直にして何事もありのまゝにす
れば、人にも、かはるがらるべし、正直は一生の得と云ふこと
ありて、子供のときより正直にすれば、死ぬまで自分の得と
なるものなり。

〔圖解〕此繪を御覽、此れは道行く人が物を落したるを、子供
が拾ひて、其人に與へ居る所なり、總て人の物を我物とす

るは、悪しきわざなれば、拾ひ物とて是れを我物とするは
宜しからず、又人が物を落したるを見て、知らぬふりして
棄置くも宜しからざるわざなれば、かゝる時には其品物
を其持主に返すべし、何事に付ても總てかゝる心持にて
正直を専らとすべし。

第八 すなほなる子供

目上の人にかからひ、目下の人をあなどり、人の云ふことを
きり、我がまゝ勝手あるはよろしからず、父母兄弟の云ふ
ことより、他人の云ふことまでも、よくきゝ、わけて、すなほに
すべし、子供のすなほなるは、かはゆきものなれば、よく人に

も愛せらるゝなり、

(圖解)此繪を御覽此れは學校通ひの子供がよく母の教よ
したがりひすなほなる事を畫きたるものなり、此處は第一
圖其子供が顔を墨たけになして歸れる故母が顔を洗
へと教へて居る處なり、此處は第二圖其子が顔を洗ひ居
る處なり、此處は第三圖其子が顔を洗ひ終りて立派にな
りたる所なり、何事によらず、父母祖父母姉様兄様おどの
教はよく守り、萬づすなほにすること、此子供の如くなる
べし、

第九 行儀よき子供

人の前にて、見ぐるしきかたちをなすは、子供なりとてよろ
しからず、客ある時に菓子などほしがり、又足なけたして、そ
の菓子をやたらし食ひなどするは、皆見ぐるしきかぎりな
り、何事につきても、行儀はおろそりよすべからず、

(圖解)此繪を御覽、是は一人の子供が、其おかし様に玩具の
馬をもらひ、丁寧に手に受けて戴き居る處なり、總て親よ
り物を賜はりたる時などには、行儀よく戴きをさむべし、
又其賜はりたるものは、親の手づから下し賜へる物なれ
ば、大切に弄び、心なく打ちこはす事など、なき様に心掛く
べきなり、

第十 教師をうやまふ子供

學問をならひ、智慧をみがくは、皆教師のおかけなれば、其れかけを思ひて、かりそめにも教師に無禮のことあるべからず、心のかぎりうやまふが、よき生徒なれば、教師をうやまふことをれこたるべからず、

〔圖解〕此繪を御覽、是は二人の子供が、途中にて我が學校の教師に出逢ひたれば、丁寧に禮をなして居る處なり、總て教師は我に學問を教へ、我智慧を磨き、吳るゝ先生なれば、途中にて出逢ふ時も、學校にてなす通り禮をなすべし、又教師にあらせども、我れより目上の人に逢ひたる時は、矢

張り同じ様に禮すべきものなり、

第十一 書物を大切にする子供

學問をれば、え、智慧をみがくも、みな書物の力によるものなれば、書物は、と大切なるものはなし、且つ書物には、時によりいとも尊き人のこと、がらをも書きしるしあるものなれば、これを粗末にすべからず、子供なりとて、書物を大切にすべきものなり、

〔圖解〕此繪を御覽、此れは學校に行く子供が、書物をテーブルの上にて見終り、大事に是をカバンの中に入れ居る所なり、書物を粗末にすれば、墨をこぼして黒くなり、又破れも

して、用お立ぬ様になり、新かる物を買ひ求めんとすれば、再び親に心配をかくべし、親たちは一冊の書物を買ひあさふるにも、我子の行末を思ひ、わざく御金を出して買ひ玉ひしものかれは、夫れを猥りにけがしやぶりなぞするは、不孝にも當る譯なり、されは書物をは此子供の如く丁寧に取り扱ふべきなり、

第十二 勇氣ある子供

事に臨みて心いさむは、子供もありてもゆゑしきものなり、物あれぢ恐れて卑怯なるは甚た見ぐるら、彼の桃太郎が鬼が島に攻入り、群がる鬼共を物ともせず、遂に鬼どもを討ち

従へたる勇氣の如き、誠に勇の手本ともなすべきものにて、誰れも日頃より勇氣をやしなひ、事へのぞとておくれを取らぬやうに、なしたきものなり、

(圖解)此繪を御覽、此處は桃太郎が犬、猿、雉(第一圖)と評議せる所にて、此處(第二圖)は鬼が島を討ち従へ居る處なり、此處にて桃太郎の話に適宜に話すべし)

桃太郎

ひかしく、爺と婆とあり、ある日、爺は山に柴刈にゆき、婆は川に洗濯にゆきたるが、婆が洗濯しける處に、一ツの大なる桃の實が、流れにつれて、浮きつ沈みつして下りけり、婆は珍らしく思ひ、かたへの竹の棒にて、これを引きよせ、取り上げ、るゝ、誠に類なき大桃なりければ、爺にも見せて食はせんと、急ぎ洗濯をしまひて家に歸れり、頓て爺も、歸りぬれば、と

もに桃を割りけるに、不思議も核の中より立派なる男の子一人飛び出でたり、爺婆は一方ならず喜び、其子を桃太郎と名付け、心をこめて育てけるに、桃太郎は體たくましく、勇氣人にすぐれて成人しけり、うらりければ桃太郎の鬼の島に渡りて、寶物を取り歸らんと志を起し、爺婆にも語り、其ゆるしを得しかば、婆に黍圍子を拵へもらひ、支度を調へて出立したり、急ぎゆく程に、道にて一疋の犬出て來りて、桃太郎に向ひ、腰にさげたるの何にて候やと問ひける故、桃太郎は、是こそは日本一の黍圍子なりと答へければ、犬は、一ツ我も與へ玉へ、御供致さんと云ふ、桃太郎は、左らばとて、腰の包みより圍子一ツ取出して與ふ、頓て一疋の猿來りて、同じことにて圍子一ツを與ふ、次に一羽の雉飛び來りて、是も同じく、圍子一ツを請ひければ、之に與へ、桃太郎の犬猿雉をつれて行く程に、鬼の島の東門に着ければ、方まかせの之を打破りて中に入れ、犬猿雉も一同引つゝきてかけ入りたり、鬼ども大に驚き騒ぎ、勢を揃へて打

てかゝるを、桃太郎始め、犬猿雉相手となりて大に戦ひ、小鬼どもを打ちなびけゝるに、鬼の大將赤童子大に怒り、鏡の棒を打振りて、桃太郎に打てかゝるを、桃太郎得たりと受けて、火花を散らして戦ひしが、遂に鏡の棒を打落し、引組んで赤童子を取て抑へ、生捕どなしたり、赤童子はもはやせんすべなく、有りど有ゆる寶物を差出して降参せんと云ひければ、桃太郎、然らばとて打ち笑み、鬼どもの降参をゆるし、寶物を取集り、犬猿雉の手柄をもはめたて、勇みいさんで家に歸れば、待ち受け居たる爺婆も喜ぶ事限りなし、桃太郎は相知れる人どもを呼びつゝ、毎日酒盛をなし、鬼の島を働きたる物語りて、皆人を喜ばせぬ、めでたしく、

第十三 おやにはかうくすべし

我々の親は、我々のからたを生みつけ玉へる人なれば、いと
もたふとし、子たるもの、先づ第一に親に孝行をはけむべ

し、親は孝行をはげむものは、其身もおのづから福を受くるものなり、孝行のすべきものにあらざや、孝行とは親の教にたがはず、よくつかへまつることなり、

〔圖解〕此繪を御覽、一人の若者が、年老いたる親を扶けて、瀧を見せ居る所なり、昔し或る樵夫の子が、親の酒を好むを見て、日頃おにどかして親に酒を飲ませんと思ひ居し、よど貧乏にして意の如くならざるを、殘念に思ひ居しに、或日山に入りて木を伐り、誤りて下の谷に墮ちたるとき、其の近邊に酒の氣のするより、不思議のことと思ひ、あたりに見廻すに、向ふの瀧の流れが匂ふやうなれば、試みよ

一 其水を汲きて飲みたるは、酒の味のしければ、喜て汲と歸り、親に飲しめ、其後は毎日此瀧を汲ては、心のまゝに親とすゝめたりと云ふ話あり、此繪は其事をかきたるものなり、孝子が大切に親に付き添ひて、瀧を見せる様如何にも親切の心は見え見ゆ、誰も能く親の心を慰むることを心掛け、物見などに出る時には、かやうに親切を盡すべし、

第十四 兄弟はなかよくすべし

親子につゞいて、親しとの最も深きは兄弟なり、親子につゞいて、離るべからざるも亦兄弟なり、故に兄弟はたとひ如何なることありとも、争ひなどありてはならず、起さるにも寢

るにも、なかよくしてくらすが兄弟の道なり、

〔圖解〕此繪を御覽、是は二人の兄弟の子供が、何やらむつまじく話しながら、庭の内にて歩き居る所なり、第三圖にもある通り、總て兄弟は幾人ありとも仲よく、うらと物を分け食ふ時などは、勿論僅のものを見るにも、自分獨りで見ることなく、兄なれば弟を呼び、弟なれば兄を呼び、一處に連立て行き、其樂を共にするやう、互に親切を盡して、仲よくすべきものなり、

第十五 兄弟は両手の如し

前課にて話せし如く、兄弟はしたしま上にも、離るべからざ

るものなることは、ちやうど両手の如し、右の手は左の手をたすけ、左の手は右の手をたすけてこそ用も足るなれ、其れと同じく、兄は弟をたすけ、弟は兄をたすけて始めて兄弟のしたしまもあるものなれば、兄弟は両手と思ひて互に助け合ふべきなり、

〔圖解〕此繪を御覽、是は一人の男が両手をひろげて二人の子供に見せて居る所なり、總て兄弟と云ふもの、孰れも同じ親の血を分けて生れたる者なれば、體は二人なれども、本を云へば一人も同じやうなるものにて、人間の體に譬へて見れば、ちやうど両手の如く、右の手も無てはなら

ず、左の手も無てはならず、左右の手がありてこそ並々の
はたらきも出来るものなれ、されは右の手が左の手を助
くる如く、兄の弟を助け、左の手が右の手を助くる如く、弟
の兄を助けて、仲よくすべし、兄弟と云へば姉妹のことも
固より同じことなり、

第十六 友だちは親しくすべし

友たちと交はるには、隔てなきやうにすべし、若し隔てあり
ては、同ト處に居りても、心れけてまことの親しみは起らぬ
ものなり、只何事もうちとけて、親しくするが、かんようなり、
〔圖解〕此繪を御覽、是は二人の子供の友たちが、一ツの机を

中にして、何やら書物を見て、睦じさうにして居る處なり、
總て他人ながら親兄弟に次て親しきものは、心を知り合
ふたる友たちなり、友たちハ善き事をすゝめ、悪しきこと
を諫むるものにて、我身に取りては大切なる人なれば、日
頃より心を打あけて、懇ろに付き合ひ、親しくあすべきもの
なり、

第十七 友の難儀は救ふべし

人の難儀を見て、之をすくふはよきことなり、況して親しき
友の難儀を見ては、力のねよぶかぎり之をすくふこそよけれ、
世には日頃の親しみに似けなく、友たちの難儀を見すつ

るものあるは、甚だたのみがひなきことなり、能々つゝしむべし。

〔圖解〕此繪を御覽、昔し唐土に司馬光と云ふて名高き人あり、其人の幼き頃のことなるが、或時友達の子供と遊び居たるに、其中の一人が木の枝から落て、甕の中に陥り、既に命も危かりしに、司馬光は早くも甕を打破ることを思ひ付き、石にて打破りしかば、其子は水と共にはどはしり出て、命助かりたり、是は其様を畫きたるものなり、友の難儀を救ふは様々あるべけれども、道にて誤て溝に落込みたるを助けて引出すも、救ふの一ツなり、難儀ある時、友を

見棄つべからず、

第十八 年よりはいたはるべし

年よりは我々より目うへの人なり、其上わかきものとはちがひ、からと衰へて自由ならず、ゆくさきも短きものなれば、これをなくさめいたはるべし、年よりをないがしろにし、又はおろそかにするは甚だよろしからず、心得べきことなり、〔圖解〕此繪を御覽、是は途中にて俄かに雨の降り出し、時一人の生徒が、一人の老婆の雨にぬるゝを氣の毒に思ひ、己が傘の下に入らしめ居る處なり、總て年寄りたる人を見ては、かやうのいたはりを加ふべきなり、

第十九 かたは者はあはれむべし

かたはものに親切にすべきことは、前にものべたるが、かたはものを見て、かれもなみくの人ならば、心にひけを取ることもなかるべきにと思ひやりて、いたはりあはれむべし、かたはものをたろそかに思ふは、はなはたよりらぬことなり、

(圖解)此繪を御覽、是は船より上らんとせるかたはものを見て、一人の子供が憐れに思ひ、手を引て親切に扶け居る所なり、總てかやうなる不具ものゝ難儀を見たる時は、我が力の及ぶ限りは、これを助くる心あるべきなり、

第二十 教師はうやまふべし

教師を敬ふべきことは前にものべたるが、己れをよしへ、己れをみちびくは、いづれも教師のはねをりて、我々がやうやくにして人なみとなるも、とて教師の恩なれば、其恩をありがたく思ひ、心のそこより之をうやまふべし、教師をたろそかゝ思ふ人は何事をも學び得ざるなり、

(圖解)此繪を御覽、是は二人の子供が教師の前にて敬禮をなして居る所あり、此れも第十圖で云ひし如く、我れを導き教ふる教師は、我れに取りては甚ど有難き人かれは、學校にては何所にて、かりそめにも失禮のふるまひなく、

心の底よりあがめ尊びて、うやまふべきなり、

第二十一 行儀は正しくすべし

行儀よき子供の話しは、前にも述べたる如し、人はたちあふるまひとて、立つにも坐るにも、心を用ゐて、じとやかにし、がさつに、あらくしきことなきやうすべし、人の前にて禮儀を失ひ、麁略の振舞あるべからず、

(圖解)此繪を御覽、是は二人の子供が、膳に向ひておとなしく食事をして居る所なり、誰にても食事の時はおとなしくして、茶碗の飯や椀の汁をこぼしなごせぬやう、氣を付けて食すること、此繪の子供の如くし、其他何事に付ても

總て行儀よくなすべきなり、

第二十二 いたづらごをなすべからず

とづかの遊にも、身のためになることをかんがへて、なすやうにすべし、雀の兒を捕へ、犬をうち、襖や壁まらくがきをなすなど、わるきいたづらはなすべからず、いたづらより、思はぬけがなご引きおこすこと、まゝあるからひおれ、いたづらごとはなすべからず、

(圖解)此繪を御覽、是はいたづら子供二人が、一人は繩にて罪もなき犬をくより、一人は棒をふり擧て其犬を撃ちたる故、犬は大にたけり狂ひて、子供に噛み付きたる處なり、

總て益なきいたづらを爲す時は、此の子供の如く、思はぬ大けがをしいたし、大事の體に疵を付て、親にも心配を掛け、不孝となるものなれば、總ていたづらなることはすまじきわざなり。

第二十三 過をかくすべからず

如何なる人にて、思はぬそさうと云ふことはあるものなるが、爲したることは、とりうへしはつかぬものゝを、速かま之をわび、以後をつゝしめて、ふたゝびなきゞるやう心掛くべし、いつまでもあやまちをかくして、知らぬかほするは甚たよろしからず、心得おくべきことなり。

(圖解)此繪を御覽、是は一人の子供が、思はぬさうにて、親より買ひ賜りたる石盤を破りたれば、ひたすら其過ちをこび居る所なり、總てかやうの過ちありたる時は、包み隠さずして、其をさうのわびを云ふべし、こびてゆるしを受けたる上は、再び此様の過ちなきやう、後來を慎むべし。

第二十四 正直にすべし

正直なる子供の話し、前にも述べたるが、心にもなきうろを言ひ、又取るまじきものを取りて、我物となすのたぐひは、皆よろしからざるわざなり、何事も只ありのまゝよし、取るまじきものは取らざるを、正直とは云ふなり、人は正直がかん

じんと知るべきなり。

〔圖解〕此繪を御覽、是ハ子供が學校に持行しかはんを、公園にて忘れたるを、傍に見て居し一人の正直なる子守が拾ひ取りて、其子供に渡して居る處なり、總て人の忘れたる物などを見付けたる時は、親切に其忘れ主に返し、惡しき心を浮べさること、此子守の如くなすべきなり、

此處左の如く敷衍するもよし、

すべて、有ることを無しと云ひ、無きことを有りと云ひ、人をあざむきうそを云ふは、皆正直ならざる行ひかれは甚た宜しからず、是も前に話したる司馬光の幼き頃のことな

るが、或日胡桃くるみの實をおもちやにして居たる所に、光の姉來りて皮をとりやらんとせしも、かたければ取れず、其まゝ棄置て他へ去りたり、其後に召仕ひの下女が來りて、其實を熱湯につけたやすく皮を取りて遣りたる後に、其姉再び出來りて、誰が皮を取りたるやと尋ねしとき、光、我が手がらにして自分がとりたりと答へたり、光の父之を聞て、何とて左様のをそを云ふぞとて叱りければ、光は大い後悔し、是より一生うそを言ひざりしとぞ、是れと同じことにて、如何なる些細のことも、うそを云ふまじきものなり、

第二十五 危き遊をなすべからず

同じ遊びごとをおすにも、安穩のことをえらび、けがせぬやうよすべし、みたりに高き木に登り、泳ぎをしらすして深き水に入るおど、かりをぬにも危ふき遊びごとをなすべからず、どづかの遊びごとにて、其身をそこなひ、不孝の罪をおかすことなしとも云ひがたし、よくくつよむべきなり、

〔圖解〕此繪を御覽、此所圍内の圖は一人の子供が橋の欄干を渡り、面白がりて猶も進み行く所あり、此所周圍の圖は是れ此通り欄干の上より、眞さかさま下の川中に墮入り居る處なり、總て危きことをなして遊と爲す時は、此繪の通り思はぬ怪我をなすものなれば、此繪を見ても恐ろ

しと思ひて、危きことに近よらぬやうにすべし、

第二十六 からだは大切にすべし

からだは、父母より賜りたるものなれば、そまつし思ふことあるべからず、我が身を大切にすることは、とりもなほさず父母のからだを大切にすると同じわけなれば、これも孝行の一ツと思ひて、我れと我が身をろくなはぬやう心掛べきなり、

〔圖解〕此繪を御覽、是は二人の子供が人の體の骨組杯の圖を見て居る處なり、總て人の體の、外から見れば堅固の様なれども、内に入て見れば、頗る入組み居りて弱き者なれば、不養生をするときは、忽ちに病を生じ、命を落すことあ

るべし、されば平生より我が體を大切にすべきものなり、
是も孝行の一ツなり。

第二十七 食ひ物を慎むべし

病は多く食ひものより起るものにて、食ひものに氣をつくる人は、病にかゝることすくなし、はやみやみなども、食ひ物より起ると云へば、熱せぬくたもの、かはりたる食ひものなごは、心して食はぬをよしとす、又齒の痛みなどは多くは甘きものより起るものなれば、甘きものなど、食ひ過ぐるは宜からず、病は口より入ると云ふこともあり、慎むべきなり、

(圖解)此繪を御覽、是は一人の子供が、屋臺見世の駄菓子、菓

物などを見て、ほしくなり、之を買はんと云ふを、附き添ひたる下婢、止め居る處なり、善し惡しをも擇ばず、やたらに物など食ふ時は、忽ち中てられ、大事の體をもそこなふことあれば、能く氣を付て食ふべきなり、

第二十八 わる口を云ふべからず

我が身を、へりみせして、人のわる口を云ふはよろしからず、何人もよきことのみにあらず、故にあじきことは之をすて、よきことは之をほむべし、人をうしれば、己れも人にそとられ、人をほむれば、己れも人にほめらる、わる口を云ふものは、兎角人に憎まれ、わざはひをまねくものなり、去れば、わざ

ハハ口より出づとも云へり、わる口ハ云はぬものなり。

(圖解)此繪を御覽、是は男の子供二人が、女の子供一人を馬鹿にして、たかめづらとか何とか悪口を云ひし故、女の子は泣き出して向ふへ行く所なり、總て人の悪口を云ふは宜しからず、自分なりとて人ハ悪口を云はるれば好き心持はせぬものなれば、誰れも同じことハ思ひやりて、かやうのことは云はぬものなり、人の悪口を云ふ人は己もいつか大なる禍を被るべし。

第二十九 疳癩を起すべからず

わづらの事にも氣をいらち、辛抱の心を死はよろしからず、

何事も己れのまゝならぬは世の中の習ひとあきらめ、疳癩をおこさぬやうにすべし、分別なく怒り詈るハ元來己がまゝより起るものにて、後悔すること多し、されバ疳癩ハ必ずおこさぬやうにすべし。

(圖解)此繪を御覽、是は子供が何か氣に入らぬことありて、我まゝにも疳癩を起し、此通り(上圖)今まで遊び居たる、獨樂や、太鼓のはちを罪もなき下婢に投付けたるを以て、頓て此通り(下圖)其親に叱られ居る所なり、總て氣に入らぬことありとて、疳癩を起すは我まゝより來るものなり、何事も堪忍を先にして、疳癩は起すべからず。

第三十 弱きものをいぢむることなかれ

世にはとかく弱きものをあなざりて、之をいぢむるものあれども、これ甚だ悪きわざなり、弱きものをいぢめて、己れつよきやうに見せんと思ふは間違なり、誠し勇氣ある人は、弱きものをば、殊更憐み助くるものなり、おかのみならず、弱きものをいぢむれば、後し己れ大なる禍を受くること多し、かの猿蟹合戦の話を見よ、猿は蟹をあさむきたるのとならず、蟹を弱きものと見て、堅き柿を投げ付て、いぢめしかば、後し己れ遂し己の身を滅したり、よくよくかんがふるべし、

(圖解)此繪を御覽、此所(右圖)は猿が柿を蟹に投げつけ居る

處、又此所(左圖)は猿が杵臼、卵、蜂どもを攻つめられ居る所なり、今猿蟹合戦の話と話を話して聞せん、爰にて左の話を適宜に話し聞かすべし

猿蟹合戦

むかし、一疋の猿ありて、山の麓を廻りけるに、不圖一疋の蟹に出遇ひたり、猿は一ツの柿の核を拾ひ、蟹は一ツの焼餅を持居りたり、猿は其焼餅を見て一まうけせんと思ひて、蟹に向ひ、どうぞ柿の核と焼餅とかへて下さるまいかと云ひしかば、蟹は直に承知して焼餅を猿に與へ、其代りに柿の核を得て、直にこれを其あたりへ植付しに、柿は速に芽が出て、僅の間に見上るは、高き高く延び、枝のしわるまで實を結びたるが、蟹は木に登ること出来ざる故、登りて實を採り與れるやうに猿に頼みたり、猿は直に木に登り、熟したる柿は己れ飽まで頬の囊に詰め込み、熟せざる柿のみ蟹に投げ付けたり、蟹は大に甲を傷けられ、やうやくの事に

て命を助かり、我住穴に馳せ込み、痛さに堪へず臥し居りたり。蟹の親類や仲間の者ども、事の次第を聞いて大に怒り、つひに猿に向ひて戦を開きて猿の本陣を襲ひしかば、猿は大軍を引きつれ逆落しに攻寄せ來りけり。蟹は迎も叶はぬ勢を見て取り、益々憤り、我穴に歸りて軍評定を開きたり。茲に杵臼蜂卵出座して敵打の謀を定め、猿の本陣に和睦を請ひ、猿の大將を誘ひける。猿は得たりかしこしと、手ふらにて蟹の家に来り、圍爐の傍に坐りたり。此處にて猿は火箸を取て火をかきけるに、灰の裡に隠れ居たる卵跳り出て猿の腕先に焼付たり。猿は大に驚き、痛さを忍ばんと糗味噌桶に手をさし入るれば、爰に隠れ居たる蜂俄に飛び出で、猿の泣面をさしけるにぞ、猿はたまらず大聲に叫びつゝ、裏門さしてかけ出しけるに、杵臼の上より落ちかゝり、大地にドット倒れたり。之を合圖に數多の蟹共、剪刀を高く振り上げ、四方より猿を取捲き、敵々よばさみたてゝ殺したりとぞ。

第三十一 能く勉強すべし

遊ぶは樂にて、勉強は苦し、去れど樂なりとて遊び居れば、學問も智慧もなき人となり、苦しくとも勉強すれば、學問もでき、智慧もまして、善き人となる。後の苦しみは今の樂にはかへがたく、今のらくは後の苦しみにかへがたきものなれば、能く勉強すべきなり。

(圖解)此繪を御覽、是は子供が一生懸命になりて學問を勉強して居る所なり、幼き時は別して勉強がかんじんにて、勉強さへすれば、智識もたけ、才能もまして、行々は如何なる名高き人とも成り得べきものなれば、幼き時より心を

こめて、此子供の様に勉強すべきなり、

第三十二 路くさをくふべからず

學校に通ふときなど、家を出るにも時間をたがへぬやうにすべし、又途中にて面白きものなどを見て、むたに時間をつひやすはよろしからず、遊歩の時間は別に之れあるものなれば、其ほかには、課業をつとめ、いさゝかたりともれこたりの心を出して、道ぐさなどすべからず、道を行くは空をながめ、わき目をふりなどするは、時のつひゆる計りならず、つまづき、ころび、或は物に行きあたりなどすること多ければ、是よくく慎むべし、

(圖解)此繪を御覽、是は學校通ひの子供數人が、途にて釣をして居る人の傍らに立ち止まり、面白さうに見て居り、他の一人は見向きもせず、先きに行く處なり、總て學校の行通ひなどには途中に如何なる面白き物ありとも、夫れに氣を取られて、浮かくと時間を費ひやすなど、途くさは爲すべからず、先きに行く小供の様に、他に氣を取られず、一途に我が志す處にのみ足を向くべきなり、

第三十三 國と君とを忘るべからず

國とは我々のすむ處にして、君とは我々のすむ所の國を支配し玉ふ御方なり、我々は此日本に住むものなれば、一日た

りとも此日本國あることを忘るべからず、又我々を支配し玉ふ君をば、一日たりとも忘るべからず、我が身のやすきは國の恩、我が國のやすきは君の恩、國をければ君なく、君なければ國なし、國と君とは忘るべからず、

(圖解)此繪を御覽、此所(上圖)は天長節、紀元節の日に家々が日の丸の國旗を軒先に掲げて、祝ひ居る處なり、又此處(下圖)は至尊の君が觀兵式に御臨みある處にて、菊の御旗も見ゆ、我々はすべて此國に生れ、此君の恩澤にうるふものなれば、めめく國と君とを忘るべからず、

第三十四 君が代

本課は諷誦を首とす、歌の意は、我が大君の御代は千代も八千代もかぎりなき御代をすぎたとははさむれ石と云ふさよやかなる小石のおひくくと生長して、末の末に大なる巖となり、猶ほ其巖の年へて苔のつくまでも、變りなく、目出度き御代のつゞけよがしと祈るなり、石は生長するものにあらず、されは斯く云ふは愈々其久きを祈るの心著し、誰も其心して我が大君の御代のさかえをいのるべきなり、

(圖解)此繪を御覽、是は我大君のいまします東京の御城の正門なる二重橋の景色なり、此に住み玉ふ大君のことをは、此繪を見るよ付ても、有りがたく思ひ、千代に八千代に、

御榮えあらせられんことをねんじまらすべし君に忠
 と云ふことあり忠とは能く君に事ふることなり忠と孝
 とは我々が身を修むるに最も大切のことなれば誰も幼
 くとも常に此事を心にかげ寝ても覺ても忘るべからず

修身入門 教師用終

K1211

明治二十五年六月廿四日印刷 入門
 明治二十五年六月廿五日出版

定價金 八錢

版權登錄

版權所有

著者兼 發行所 福岡縣 末松謙澄

東京市芝公園第五號地

發行所 精華舎

假事務所同上

印刷者 曲田成

東京市京橋區築地二丁目
 東京築地活版製造所内

